

# 環境に配慮したサガラメ移植基盤開発研究

(予算区分 研究費 研究期間 2020～2022 年度)

担当：水産・海洋技術研究所 深層水科 吉川康夫

## 【研究の背景とねらい】

- ・ 榛南地域沿岸には一続きの藻場としては全国最大のサガラメ・カジメ藻場が存在していましたが、1985 年頃から発生した磯焼けにより衰退し 2000 年以降消滅してしまいました。このことから、アワビやサガラメを漁獲している地域の採介藻漁業は壊滅的な状況が続いています。
- ・ 県は 2002～2010 年度に榛南地区地先型増殖場造成事業を実施し、大規模な藻礁ブロックの設置により 135 ha のカジメ藻場を造成しました。造成藻場が核となりカジメ藻場は平成 30 年には 870ha まで復活しました。しかし、サガラメは生育水深が浅いことからカジメと同様の移植手法は適さず、現在のところ藻場の回復には至っていません。
- ・ 大量の種苗移植を可能にする効率的な移植手法の開発および海域での植食性魚類からの食害圧を軽減する移植手法の開発に取り組んでいます。
- ・ 藻場造成を環境に配慮して進めるために、生分解性材質の移植基盤を開発します。

## 【これまでに得られた成果】

(2019 年までの成果)

- ・ サガラメ移植に適した樹脂繊維製マットによる移植方法とカジメとの混植による食害圧を軽減する移植方法を確立しました。

(2020 年の成果)

- ・ 生分解性材質で作成した移植基盤の海域での有効性を確認しました(写真 1)。
- ・ 早期成熟が期待できる種苗の適正な藻長を検討するために、葉長の異なる種苗を海域に移植しました。
- ・ 移植基盤に種苗を取り付ける作業を簡便化し、5 日間で 1,000 基の海域への移植が可能となりました。



写真 1 海域に設置した移植基盤  
(設置後 3 週間経過)

## 【期待される効果】

- ・ 生分解性移植基盤を開発することで、環境に配慮した移植を実現できます。
- ・ 次世代を残す可能性を高めるため、移植 1 年目に成熟するサガラメを移植することが可能となり、サガラメ藻場の回復が促進されます。
- ・ 榛南地域のサガラメ藻場が回復することで、サガラメ採藻漁業が復活し当該地域の漁業者の所得向上に寄与できます。

## 【今後の計画】

海域に移植した種苗が成熟するまで残存し次世代を発生させる、核になる藻場造成を目指します。移植手法をより効率化させることで、核藻場造成に必要と考えられる 4,000～5,000 個の移植基盤の供給を目指します。

(作成 2021 年 4 月)